

ESSAY

都市景観賞と同時に募集した『福岡市景観エッセー』。2回目の今年は101人から104作品もの力作が寄せられました。その中から選考された4作品を紹介합니다。



希望の灯

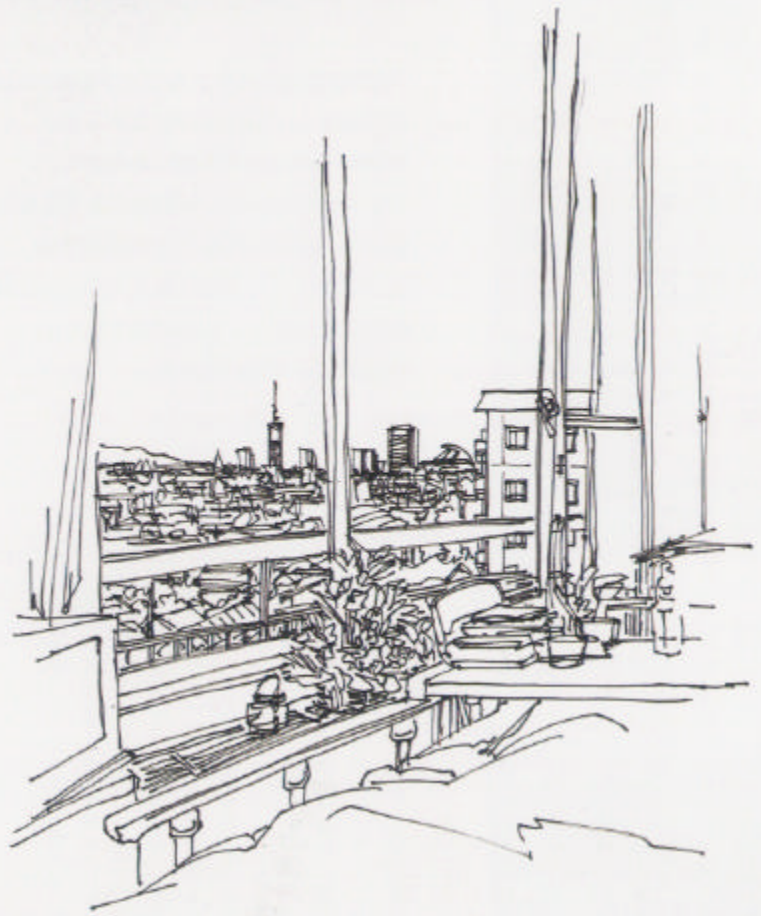
嶋崎 真知 Machi SHIMAZAKI
早良区御池御池地

福岡大学附属病院西病棟、個室の窓から見た福岡タワー、シーホークホテル、福岡ドームの景観は忘れられない。

4年前の8月、20歳になったばかりの長女は深夜、救急車で福大病院に運ばれた。翌日、開腹手術。急性盲腸炎が破裂して腹膜炎をおこし、今年度ワースト3の状態でしたと医師が言った。

長女には重い知的障害がある。自分で話すことはできない。

娘は集中治療室の個室に入った。医師や看



護婦詰所とはカーテンで仕切られている。窓もトイレもない。

娘は興奮して暴れる。強い睡眠薬を使っても寝ない。娘が動くたびに点滴や尿管がはずれるので二女や私の両親、弟夫婦、姪に手伝ってもらい常時5人で娘が動かないように気をつけた。

点滴がある方の手は夫か私を受けもち娘の右手の係、左手、右足、左足、尿管の係と5人の汗と涙と息づかいが祈りとなり10日後には西病棟の個室に移ることができた。

うれしかった。看護婦が窓のブラインドを開けると陽の光がまぶしく、生きている実感がこみあげた。

窓の傍らに行くと大きな窓からは空が見え、木々や家々の向こうにきりつとした福岡タワー、瀟洒なシーホーク、人なつっこい福岡ドームが見えたときは歓声をあげ「見える、見える、早く元気になろうね」と娘の手をにぎった。夜になって灯りがつくとき美しい。灯りは希望の灯となつて勇氣と躍動を与えた。そこに集まる人々のざわめきや活気がエネルギーのうねりとなつて私に伝わって来る。私は目を閉じ深呼吸をしながら「がんばろう、がんばろう」と自分に言い聞かせた。

病院の夜は長い。消灯後はずっと長い。一か月間、付きつきりて看病をしながら3つの灯は命の火のように私を励まし癒してくれた。

都市のライトアップは、華やかなにぎわいという面目を奪われる。でも、灯の原点は人の心を温めることにあるのだと思ひ出した。嶋崎さん、この都会の灯の景観に大切なことをあらためて思い起こさせて下さって、ありがとうございます。(運営委員 山本 留子)